

## 発信箱

藤田 悟  
社会部

## 100年後の再挑戦

神戸・三宮に近い国道2号沿いの「賀川記念館」で週3回、いっふう変わったカフェが開かれている。「天国屋カフェ」。館内にあるキリスト教会の牧師、上内鏡子さん(46)が中心に、「生きづらさを感じている人たちの居場所を」と考えた。

この辺りはかつて貧しい人々が多く住む地域で、明治末期から昭和にかけて活躍した社会運動家、賀川豊彦氏が活動拠点とした。同氏は1910(明治43)年、スラムの人々に栄養ある食事を安く提供しようとして「膳飯天国屋」という食堂を開いたが、財政的な理由で3カ月で途絶えた。

それからちょうど100年たった一昨年4月、上内さんは賀川氏の精神を引き継ぐと「天国屋」を復活させた。

カフェは木金土の昼間に開く。最初はコーヒーや紅茶だけだったが、近所の人たちや神戸大の学生らがボランティアで手伝うようになり、カレーやハンバーグ、豆腐ステーキなどメニューも増えた。

1日20人ほどが訪れる。引きこもりの経験のある人や不登校の子供らもいて、食事を囲んで語ったり、勉強を教えたりして、同じ時間を共有する。なかなか人が集まらずに「もうやめようかな」と思った時期もあったが、地域の人たちにも支えられて、もうすぐ2年になる。

賀川氏が活動していたころの問題は主に経済的な貧困。それが今は、若者たちの心の問題にどう向き合うかが最大の課題だ。「やればやるほど難しく、簡単にはいかないなと思う。でも、人と人がつながり、信頼関係を持てる場として、とにかく続けていきたい」と上内さんは言う。

運営する側も客として訪れる側もともに迷いながらの取り組みは、現代社会で宗教がどのような役割を果たせるかという試みの一例でもある。